Title	■ 認知文法の理論的優位性に関する研究					
Sub Title	認知文法の理論的優世性に関する研究 A study on the theoretical superiority of cognitive grammar					
Author	熊代, 敏行(Kumashiro, Toshiyuki)					
Publisher	慶應義塾大学					
Publication year	2022					
Jtitle	∠∠∠∠ 学事振興資金研究成果実績報告書 (2021.)					
JaLC DOI						
	2001年度の学専振興姿令による主たる研究成用け、「動詞『とろ、の名美州・認知立法的考察」					
Abstract	2021年度の学事振興資金による主たる研究成果は、「動詞『とる』の多義性:認知文法的考察」 という題目の論考を「教養論叢」の第143号に掲載したことである。 国語辞典の入辞林の「とる」の項目には、六分類(10.中分類73、そして小分類14に渡り、総数01 にもおよぶ語義が提示されている。本論考では、これらの語義を個々に精査し、重複や不適切な 配置のため、明らかに整合性が大きく欠如した記述が多く存在していることを指摘した。辞書と いう性質上、限られた時間と労力の中で、膨大な数のことばの面訳を作成せなはならず、現実的 な作業上の妥協はある程度はいたしかたないことであるが、それを斟酌しても、重大な欠陥であ ると言わざるをえない。 続いて、大辞林の「とる」の用法の記述に関して、指摘した問題点を解消しうるような再分類を 推案した。10の大分類、140小分類を設定し、210用法に整理した。全体としては、極めて整合 性の高く、用法間の類似点と相違点を明示することが可能な分類を構築した。そして、この再分 類に基づき、国広(1997)の提案する再分類を吟味した。国広が大辞林の大分類をそっまま踏襲 しているという重大な問題点を指摘することとす可能な分類を構築した。そして、この再分 類に基づき、国広(1997)の提案する再分類を吟味した。国広が大辞林の大分類をでのまま踏襲 しているという重大な問題点を指摘するとともに、抽象度の違いによる大分類の区別が不十分で あることも示した。 さらには、認知文法の枠組みを用い、提案した再分類における各用法の意味構造を詳細に提示し た。具体的には、意味構造を図式化することによって、各用法の類似点と相違点を正確、かつ詳 相に浮き彫りじした。そして、どの用法がどの用法がら拡張であるかを明っし、拡張元が複数あ る用法も認定した。用法の意味構造が大きく異なる用法が存在していることを突き止め、それは 連鎖的な意味拡張の結果であることを勧じた。全体としては、「とる」は、各用法が複雑に顕正 した、密接な構造のネットーワークを形成していることを視覚的に明確に提示することに成功 したを言える。 The principal achievement made possible by the Academic Development Fund for 2021 was a research paper titled "The Polysemous Structure of the Japanese Verb toru: A Cognitive-Grammar Approach," which was published in the 143rd issue of Kogo-Renso. For the verb toru, the Japanese Verb toru: A Cognitive-Grammar Approach," which was published in the 143rd issue of Kogo-Renso. For the verb toru, the Japanese-lements. Even with the admission that the very nature of a dictionary necessitates selecting a vast number of them were shown to be highly incoherent with overlapping descriptions and inappropriate place-ments. Even with the admission that the very nature of a dictionary necessitates selecting a vast number of entries and identifying their usages with limited time and resources, this incoherence unfortunately constitutes some gross inadequacy.					
Notes						

ι	JF	٦I	

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 2021 年度 学事振興資金(個人研究)研究成果実績報告書

研究代表者	所属	法学部	職名	教授	油田畑	200 (A) T			
	氏名	熊代 敏行	氏名(英語)	Toshiyuki Kumashiro	補助額	300 (A) 千円			
認知文法の理論	論的優位性に関								
研究課題(英訳)									
A study on the theoretical superiority of Cognitive Grammar									
143 号に掲載し     143 号に掲載し     る。本     143 号に掲載し     る。本     の方     る。本     たまま     お話論指ある大のF     たならしことに     たま     たま <td>たことである。 た辞林の「とる」 に、これらの語う た。辞書という 度はいたとる」の月 相方で、各理した 間文法の名用法の が複数ある用 あることを論じた</td> <td>こよる主たる研究成果は、「動 の項目には、大分類 10、中分 後を個々に精査し、重複や不適 性質上、限られた時間と労力の ないことであるが、それを斟酌 目法の記述に関して、指摘した 。全体としては、極めて整合性 ぎき、国広(1997)の提案する再 こ、抽象度の違いによる大分類 みを用い、提案した再分類によ の類似点と相違点を正確、かつ 法も認定した。用法の意味構成 と。全体としては、「とる」は、各 に成功したと言える。</td> <td>詞『とる』の多義 対 73、そして 切な配しまのたる の中で、重のたる しても、重大ない しても、を解消し はの類を吟味した のたる、用法 に のたる、用法 に のたる、 の た の の で 、 重 の た の た の た の た の た の の の の の の の の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の の の 、 の ら の 、 の 、 の 、 の 、 の う の 、 の う の 、 の 、 の 、 の う の の の 、 の の う の 、 の 、 の う の の の の 、 の 、 の の 、 の 、 の の の 、 の の の の の の の の の の の の の</td> <td>性:認知文法的考察」という題 小分類 14 に渡り、総数 81 に め、明らかに整合性が大きくな 数のことばの語釈を作成せね な陥であると言わざるをえない うるような再分類を提案した。 間の類似点と相違点を明示す こ。国広が大辞林の大分類を 分であることも示した。 意味構造を詳細に提示した。 しにした。そして、どの用法が うのまが存在していることを突</td> <td>もおよぶ語義が な如した記述が はならず、現実 10の大分類、 ることが可能な そのまま踏襲し 具体的には、意 どの用法から拡 き止め、それは</td> <th>「提示されてい 多く存在してい 的な作業上の はの小分類を に分えという ているという 味構であるかを 連鎖的な意味</th>	たことである。 た辞林の「とる」 に、これらの語う た。辞書という 度はいたとる」の月 相方で、各理した 間文法の名用法の が複数ある用 あることを論じた	こよる主たる研究成果は、「動 の項目には、大分類 10、中分 後を個々に精査し、重複や不適 性質上、限られた時間と労力の ないことであるが、それを斟酌 目法の記述に関して、指摘した 。全体としては、極めて整合性 ぎき、国広(1997)の提案する再 こ、抽象度の違いによる大分類 みを用い、提案した再分類によ の類似点と相違点を正確、かつ 法も認定した。用法の意味構成 と。全体としては、「とる」は、各 に成功したと言える。	詞『とる』の多義 対 73、そして 切な配しまのたる の中で、重のたる しても、重大ない しても、を解消し はの類を吟味した のたる、用法 に のたる、用法 に のたる、 の た の の で 、 重 の た の た の た の た の た の の の の の の の の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の 、 の の の 、 の ら の 、 の 、 の 、 の 、 の う の 、 の う の 、 の 、 の 、 の う の の の 、 の の う の 、 の 、 の う の の の の 、 の 、 の の 、 の 、 の の の 、 の の の の の の の の の の の の の	性:認知文法的考察」という題 小分類 14 に渡り、総数 81 に め、明らかに整合性が大きくな 数のことばの語釈を作成せね な陥であると言わざるをえない うるような再分類を提案した。 間の類似点と相違点を明示す こ。国広が大辞林の大分類を 分であることも示した。 意味構造を詳細に提示した。 しにした。そして、どの用法が うのまが存在していることを突	もおよぶ語義が な如した記述が はならず、現実 10の大分類、 ることが可能な そのまま踏襲し 具体的には、意 どの用法から拡 き止め、それは	「提示されてい 多く存在してい 的な作業上の はの小分類を に分えという ているという 味構であるかを 連鎖的な意味			
		2.研究	成果実績の概要	要(英訳)					
2. 研究成果実績の概要 (英歌) The principal achievement made possible by the Academic Development Fund for 2021 was a research paper titled "The Polysemous Structure of the Japanese Verb toru: A Cognitive-Grammar Approach," which was published in the 143rd issue of Kyoyo-Ronso. For the verb toru, the Japanese-language dictionary of Daijirin lists 10 major groups, 73 middle groups, and 14 minor groups, identifying a total of as many as 81 usages. In the paper, these usages were individually examined, and a significant number of them were shown to be highly incoherent with overlapping descriptions and inappropriate place-ments. Even with the admission that the very nature of a dictionary necessitates selecting a vast number of entries and identifying their usages with limited time and resources, this incoherence unfortunately constitutes some gross inadequacy. Furthermore, a revised classification of the usages of the verb was presented that would overcome the problems pointed out for its entry in Daijirin. The proposed reclassi-fication contains 10 major groups with 14 subgroups, listing only 21 consolidated usages. It is highly coherent, making it possible to clearly illustrate the similarities and differences among the usages. In addition, in comparison with this proposed reclassification, Kunihi-ro (1997)'s reclassification was examined. Not only the serious problem of his simply ac- cepting and following the major grouping in Daijirin without substantive modification but also the inadequacy of classifying the major groups based on their abstractness was point-ed out. Finally, the semantic structures of the usages in the reclassification were elucidated using the framework of Cognitive Grammar. To be more exact, the similarities and the differences among the individual usages were presented precisely and in great detail by providing graphic representations of the semantic structures involved. Furthermore, the source of extension of each usage was clearly identified, with some usages having multiple sou									
☆ ≠ ⊐	<b>×</b> 丘夕		研究課題に関す		家族ます	《行年日			
発表 (著者・	FCA 講演者)	発表課題名 (著書名・演題)		発表学術誌名 著書発行所・講演学会) 動士ヴはヴェック	学術誌系 (著書発行年月	<sup>E1丁年月</sup> ]・講演年月)			
熊代敏行		動詞「とる」の多義構造:認知  的考察	Ҹ又法│慶應義	塾大学法学研究会	2022 年 2 月				